

Ⅲ 夏季研究会

日 時 平成28年8月19日(金) 9:20~16:30

会 場 群馬県総合教育センター 音楽実習室

1 開会行事

(1) あいさつ 上田 裕信 先生(群馬県高等学校教育研究会音楽部会長)

コードネームを利用した創作や和歌に旋律を付けるなど、昔に比べて新しい視点の授業が増えた。特にこれからは、思考・判断・表現を視点とした音楽教育を生徒に行ってほしいと考える。音楽の先生方は一校に一人ということが多く、普段の教育活動のなかでは悩みや課題の解決は難しいと思われるが、この機会に互いの力を合わせて専門的な研修を行ってほしい。

(2) あいさつ 荻野 葉子 先生(群馬県教育委員会高校教育課指導主事)

実践発表や協議を通して、生徒の学びがより一層深まるよう、ともに研鑽を積む機会にしていだければ幸いである。

2 講義

「課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの実践のために」

講師：荻野 葉子 先生(群馬県教育委員会高校教育課指導主事)

(1) はじめに

夏に開催した教育課程研究協議会での内容と重複するところもあるが、話をさせていただきたい。

参加者が7人ずつの列になり、前8回 → 後8回 → 前4回 → 後4回 → 前2回 → 後2回 → 前1回 → 後1回と肩たたきを行う活動を1セットとして、セットの回を重ねる毎に速度を次第に速くしていく。速度を速くしていく中で、距離をつめたり、足の構え方を変えたりするなど、工夫をしていた様子が見られた。

授業における生徒たちの学びについても同様で、経験の中で気付き、考えたり工夫したりしながら身に付けたことが学びにつながる。



(2) 授業改善の視点

中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会において、平成27年8月に取りまとめられた「論点整理」を確認していきたい。

(育成すべき資質・能力)

- i) 何を知っているか、何ができるか(個別の知識・技能)
- ii) 知っていること、できることをどう使うか(思考力・判断力・表現力等)
- iii) どのように社会、世界と関わり、よりよい人生を送るか(学びに向かう力・人間性等)

(学習・指導方法にかかる視点)

- i) 習得・活用・探究という学習プロセスの中で、問題発見・解決を念頭に置いた深い学びの過程が実現できているかどうか

ii) 他者との協働や外界との相互作用を通じて、自らの考えを広げ深める、対話的な学びの過程が実現できているかどうか

iii) 子どもたちが見通しを持って粘り強く取り組み、自らの学習活動を振り返って次につなげる、主体的な学びの過程が実現できているかどうか

これらを踏まえつつ、現行の学習指導要領と照らし合わせ、言語活動の充実・発展によって生徒の主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニングの視点）からの授業改善（学習過程の改善）が大切である。

その上で留意したいのは、アクティブ・ラーニングとは、何か特定の型を示すものではないということであり、グループ学習を取り入れたからアクティブ・ラーニングということではない。音楽の授業において、これまでもアクティブ・ラーニングの要素が取り入れられてきていると思うが、大切なのは、ねらいが達成できたかということであり、この視点での授業改善について改めて確認をしていただきたい。

教科の特性を踏まえながら、学習内容が深い学びにつながる課題、問いについて、生徒の学びの変容を見取る教員の力も大切である。また、習得・活用・探究のバランスがとれているか、対話的な学びの場面が設けられているかなどを考える必要がある。ここで言う対話とは、生徒同士の対話だけではなく、教員との対話、書物との対話、自分自身との対話など様々である。その上で、思考を深めるために言語活動が充実したものとなっているかどうかを見直していただきたい。

主体的な学びを引き出すという視点として、生徒の興味・関心を引き出す工夫や、生徒の振り返りによるメタ認知、次への学びへのつながりが大切であり、特に、生徒が自分の学びについて理解しているか、何が分かったのかなどを振り返ることが重要である。さらに、その生徒の振り返りを学習指導に生かす学習評価に取り組んで、授業改善を進めていただきたい。具体的には、「習得・活用・探究」の学習プロセスを見通すこと、簡単過ぎず、難し過ぎない課題の質を検討することであり、生徒から問いを発せられるような課題を出発点として、生徒が自分自身のこととして受け止め、問いを考えることが学びの質を高めることであると考えられる。

校内外の研修・協議の場では、生徒の学びに着目し、その授業のどこで学びが深まったか、その要因は何であったかなどが捉えられるとよいので、ぜひ実践していただきたい。

(3) 主体的・協働的に取り組める課題解決型の授業を行うために

前述の内容を受けて、アクティブ・ラーニングの実践は、生徒自らが課題を見つけ、学んでいくというプロセスが重要であり、それを教員が促す授業の形である。課題解決型の協働学習を行う上では、授業づくりの視点を工夫する必要がある。先生が生徒に何を教えるかではなく、教科の中にある学問的なおもしろさを生徒がどう見いだすか、気付くかという仕掛けが大切である。そうすることで、次へ向けた学びの発展につなげていくことができる。

そのための考え方としては、ペアやグループなどでの学習形態にこだわるのではなく、学びの質や深まりを重視するということにポイントをおくことが必要となる。例えば、生徒が問いを発しながら学習する探究型の授業では、生徒は学習の見通しをもつ、自分の考えをもつ、ペアやグループで話し合う、そして学習内容や学習方法を振り返るというプロセスによって、より深化したものとなる。このように、生徒が課題を発見し、解決方法を見通し、振り返ることを繰り返すことで、他者と関わり、生徒が主体的に問題を解決していくことにつながるのである。

一方向的な講義による知識伝達型の授業にならないよう、授業の目標をしっかりと定め、グループ学習をしたことで終わらないようにすることが大切である。そのための留意点としては、計画的に、組織的に実施すること、課題の質を適切に設定することが必要である。特に、課題の設定では、音や音楽との出会わせ方、生徒のこれまでの考えとの「ずれ」や「隔たり」、音楽表現へのあこがれや可能性を感じさせ、どのような音楽にし

たいかという願いや気付きが生まれる場を設定することが大切であり、これにより必然性のある問いを設定することで可能となる。また、振り返りでは、思いや意図の高まりを自覚させることで、次への学習の意欲を高める働きかけとなり、音との関わりについても大切にしてほしい。

学習を深める活動や考え方はさまざまであるが、考えを深める場面で、「思考ツール」や「ワークシート」の活用なども有効である。情報や考えたことを整理・分析する場合など、「思考ツール」を効果的に用いることで、考えや考え方の流れを可視化することもでき、探究のプロセスを高めることにつながる。生徒の学びがさらに深まるよう、様々な研修の機会を活用していただければ幸いである。

3 協議

「鑑賞領域の授業における問いについて」

(1) 研究部より趣旨説明

昨年度の本研究会では、大熊信彦先生による講義をいただいた。その中で、鑑賞領域の学習の中で思考をアクティブにするためには、「問い」の積み重ねが大切であるというお話をいただいた。生徒の主体的な思考を促す「効果的な問い」を用意することが大切であるということである。

本日はグループ毎に、鑑賞教材に対してどのような問いを設定すれば生徒の思考が深まるかを協議していただき、学習が深まっていく「指導の流れの工夫」と「具体的な問い」を考えることで、アクティブ・ラーニングの視点に立った鑑賞領域の授業をつくっていききたい。

(2) 各班の協議内容

【1班】松平、多田、小川、島田

- 主教材：ボレロ
- 指導事項：ア、イ（イを手がかりにアを指導する）
- 学習活動の可能性：
 - ・フルスコアの提示を行う（各A部分）ことによって、違いに気付かせる
 - ・独奏曲や室内楽曲と関連させながら鑑賞をする
 - ・Aのみを聴く活動を行い、3回目のAで複調になっていることに気付く
 - ・（上記の活動に関連して）各パートをキーボードで弾く
- 生徒に思考させる問い：
 - ・楽器の音色やその違いに関する問い
 - ・個々の楽器の音色と組み合わせられた音色に注目させる問い
 - ・二種類の旋律のみで構成されているにもかかわらず、飽きない理由について思考を促す問い
 - ・好きな部分はどこか？それはなぜか？について、音色に注目させて思考を促す問い

大きな問い：ボレロの構成の特徴は何だろう？	
指導の流れ	問い
活動1：ボレロの最初のAの旋律と、最後に出てくるAの旋律の部分を聴く。 (予想される反応) 共通する部分・・・旋律 異なる部分・・・音色、強弱、楽器の量	これから2つの音楽を聴いてもらいます。共通する部分と異なる部分は何だろう？

活動2：ポレロ全曲を聴く。 (予想される反応) Aの旋律が繰り返されている。Aの旋律以外にももう一つ旋律が出てきている。強弱が変わっていつている。同じリズムが繰り返されている。	もう一度演奏を聴いてもらいます。 他に気付くことは何だろうか？
活動3：ポレロ全曲を聴く。(時々止めながら) (予想される反応) Aの旋律が2回、Bの旋律が2回を1セットとして繰り返されている。	(AとBの旋律が繰り返されていることを受けて)どんな風に繰り返されているのだろう。

【2班】住谷、根岸、大小原、野口、坂本

- 主教材：ポレロ
- 指導事項：ア、イ（イを手がかりにアを指導する）

『ポレロ』を鑑賞する学習を通して、それぞれの楽器の音色の特徴や構成とのかかわりを理解し、味わえるようにしたい。変化していく要素（楽器の音色や強弱など）と変化しない要素（伴奏のリズムや旋律など）の特徴を捉えながら、オーケストレーションの匠さによって最後の盛り上がりの部分で「すごい」という感動を生徒が感じられるようにしたい。また、この曲はバレエともかかわりがあるため、そうした舞台芸術にも使われている「すごい」という感覚（＝「魅力」）を伝えられるようにしたい。

大きな問い：『ポレロ』が「すごい曲」「魅力的な曲」といわれている理由を探そう！	
指導の流れ	問い
第1時：「ポレロ」を鑑賞し、課題を把握する。	もっと聴いてみたいところを「音楽を形づくっている要素」と関連させながら、気になった要素に丸を付けよう。
第2時：変化していく要素（楽器の音色や強弱など）と変化しない要素（伴奏のリズムや旋律など）の特徴と捉える。	「音楽を形づくっている要素」の特徴を対比しながら、表現上の効果とのかかわりを考えよう。
第3時：変化していく要素と変化しない要素が合わさった効果（魅力）と構成（バレエを含む）とのかかわりを捉える。	「音楽を形づくっている要素」がどのように変化しているのかを、変化していない要素や構成とかわらせながら考えよう。
第4時：「ポレロ」の魅力「音楽を形づくっている要素」とかわらせて捉える。	「ポレロ」の中で、ラヴェルが特にこだわったのはどんな要素だろう。またそれがどのように「ポレロ」の魅力に繋がっているだろう。

【3班】饗庭、千明、角田、伴野、前島

- 主教材：ポレロ
- 指導事項：ア、イ（イを手がかりにアを指導する）
- 授業で扱う「音楽を形づくっている要素」や事項：
 - ・反復（リズム、旋律）、強弱変化による効果、意外性
 - ・楽器の音色

・ピッコロ・ホルン・チェレスタの複数の調を組み合わせた旋律の音色

大きな問い：単純な構成をもつ「ボレロ」が、なぜ聴衆を引き付けるのか？魅力は何か？	
教師の発問と生徒の反応を中心とした指導の流れ	
教師	スネアドラムは15分間ずっとこのリズムです。(リズムを演奏して聴かせる) <u>これを15分間聴いていたらどんな気持ちになるだろう？</u>
生徒	飽きる。つまらない。疲れそう。
教師	そうだね。でもこの『ボレロ』を聴いていて先生は飽きないし、つまらないと感じないんだ。 <u>なぜだろう？</u> 考えながら聴いてみましょう。
教師	旋律も2種類しかありません。(ピアノ等で聴かせる)15分間、この2つの旋律を繰り返しています。でも飽きさせない工夫があります。 <u>どんな工夫でしょう？</u> (演奏を通して聴く)
教師	<u>気づいたことはありますか？</u>
生徒	だんだん大きくなった。
教師	それによって <u>どう感じましたか？</u>
生徒	だんだん迫ってくる感じ。テンションが上がっていく感じ。
教師	スネアドラムも強弱は変化があったね。 <u>どんな気持ちだろう？ペアで話し合ってみよう。</u>
教師	他に <u>気づいたことはありますか？</u>
生徒	たくさんの楽器が出てきた。旋律の楽器が変わったから飽きなかった。
教師	他に <u>気づいたことはありますか？</u>
生徒	最後が繰り返しじゃなかった。
教師	<u>なぜ最後だけ変わったのだろう。</u> 同じ繰り返しで終わるのではダメだったのかな。聴いてみよう。(最後に転調する前で音を止めてみる) <u>どうかな？グループで話し合ってみよう。</u>

※ _____は小さな問い、_____は協働的な学習活動

授業時間が1時間しか設定できない場合は上記のような流れで実施し、もし2時間設定できるなら、初めに「気付いたことを後で質問するよ。必要な人はメモを取りましょう」と伝えた状態で1曲通して演奏を聴きたい。その後、気付いたことを共有し、その気付きを確かなものにできるよう、音楽を聴きながら検証する時間をとる。スネアドラムのリズムや旋律が繰り返される点については、生徒が気付けると良い。そのためワークシートなどを工夫する。



4 ステップアップサポート事業推進研究員による模擬授業・実践発表

授業・報告者：坂本 将 教諭 (県立長野原高校・嬬恋高校 併任)

(1) 模擬授業と報告

本項末に資料を掲載 (pp.19~25)

(2) 質疑応答

Q 一つの題材について、どれくらいの時間を準備にあてているか？

A 新しい題材に挑戦するときには、今回ほどの仕掛けはできない。2年目、3年目と、題材を扱う度に内容を追加したり修正したりしている。パワーポイントを使うので、一度作ってしまえば修正にはあまり時間はかからない。

Q 生徒の意見を記入した色紙は、授業後どうしているのか？

A すぐには捨てずに、他のクラスに参考例として示すこともある。音楽室に貼っておくこともある。

Q 本時の活動を通して、「野ばら」の歌唱表現に深まりがあったか？

A “恋” に関してのイメージを膨らませたり、歌詞が表す情景と音楽表現との関わりについて、理解を深めたりすることはできた。自分で楽譜に当てはめて、音楽表現を工夫するのはまだ難しいと感じている。“歌詞と音楽をつなげるという視点を持つ” という点で、有効だったと思う。

Q 歌詞の読み取りだけでなく、歌唱で表現を深める場面でも、色紙を使う等何か手段を工夫しているか？

A 歌唱では実物投影機を使い、楽譜に直接書き込む形で行っている。個々の発想を共有し、各個人の表現を深めていく。

5 協議

「アクティブ・ラーニング (AL) に関する情報交換」

【1班】饗庭・小川・千明

千明先生の『翼をください』の授業実践を軸に話し合った。

千明先生の実践は、サビに入る2小節前からの歌い方について工夫させるというものだった。初めの8小節(A)では、フレーズ終わりが二分音符2つになっているのに対し、次の9小節(A')ではフレーズ終わりが全音符と付点二分音符に拡大されているということ、そしてクレッシェンドが付されているということ、生徒に気付かせ歌い方を工夫させたい。実践では、生徒は気付くことはできても、その気づきを基に歌唱表現を深める活動につながらなかったとのこと。

改善の視点として、生徒が主体的・協働的に学びを深めること、生徒が楽譜の通り、教師の指示通りに歌うことを目的とせず、表現意図をもって歌うことができるようにすることを重視して話し合った。また、どのような発問の仕方が効果的かという点も意見を出し合い、以下のような案をまとめた。

① 一通り歌ったり、音源を聴いたりする。

② 曲想(サビの部分)の変化に着目し、サビの歌い方を工夫する。

教師「曲調が変わったと感じたところはどこですか？」

生徒「サビが明るくなった気がする」 *実際の授業で生徒から出てきた回答

教師「なんで明るく感じた？」

生徒「速くなったから」

教師「速度が変わったように聞こえたのか。では確かめてみようか」

→ 手拍子をしながら歌い、速度が変化しているのではないことを確かめる

教師「なぜ速くなった、明るくなったと感じたのだろう？楽譜にヒントがあります。

ペアで探してみよう

→ 伴奏のリズムが変わることによるビート感の変化、アクセントがついていること、音高が上がること

教師「どうやって歌ったら明るく歌える？実際に歌いながら試してみよう」

→ はきはき歌う、アクセント、口を開ける、大きく

③サビの前の部分の歌い方を工夫する。

教師「ではサビ前はどうか？AとA'の違いはありますか？」

→ AとA'の、フレーズ終わりの違いに気づかせたい。

気づけなかったクラスでは、AとA'を同時に歌ったら気づかせることができた。

生徒「A'のフレーズ終わりは音が長くなっている。」

生徒「A'のフレーズ終わりはクレッシェンドが書いてある」

教師「どうしてそうなっているのかな」

生徒「サビを盛り上げたいから」

教師「どのように歌ったら、効果的にクレッシェンドして、サビを盛り上げて歌えるかな？

グループで歌いながら考えてみよう」

→ ブレスの取り方や、サビの歌いだしの発音などに着目し、歌い方を工夫する。

→ グループごとの工夫について、歌で発表させたい。

このように段階を踏んで、歌いながら考えていくことで、「楽譜に書いてあるからクレッシェンドする」というだけでなく「サビを盛り上げるためにクレッシェンドをする。そのために、この部分で息をたくさん吸う」というように、表現意図を持った歌唱になるのではないかと考えた。

AL＝話し合いと考えがちだが、話し合いによって深まりがなければあまり意味がない。答えが限定されすぎないものを問いとし、生徒の自由な発言を生かして学びを深めたい。そして、歌唱なら歌唱の、器楽なら器楽の表現につながる活動として、創意工夫や技能向上につながる場面でもAL的活動を入れられると良いのではないかと考えた。

【2班】島田・住谷・根岸・前島

ALができているのか否かの判断が難しいが、「学ぶことが面白い」と生徒が感じられる授業をつくらうと、授業づくりの視点が教師から生徒へと変わったように感じる。また、音楽、楽曲との出会いに必要性をもたせる工夫を考えるようになった。勉強をやらされている感がなくなってきたのは成果といえるのではないかと考えた。また、教師が誘導せず、生徒同士で評価、チェックし合いながら高めることができるのも成果。

特別支援学校の場合、考えていることと技術とが繋がらないことが多かったが、ワークシートを効果的に活用することで、創意工夫の過程を見取りやすくなった。これは特別支援学校でなくても、情操面と技術面の力に偏りがある生徒に有効である。

今後の改善点として、ALでは教師として求めるポイントを明確にし、生徒がどのような姿で成長していくのかを具体的に想像しながら授業を組み立てる必要がある。そして、グループ活動でも教師がうまく一人一人の学びの深まりを見取らなくてはならないと感じている。また、グループ活動に思考がいきがちだが、タイミングや手段を的確にして、生徒の思考を深めたい。

様々な価値観については生徒一人一人の思いを受容でき、互いに認め合い、集団としての思いを高め合う、芸術ならでの成長が望める。

【3班】大小原・野口・伴野・松平

ALおよびそれに限らず授業改善について、新たなアイデアを話し合った。拒否感、興味の偏りがある生徒に、どのように関心を持たせるかが難しい。興味・関心を高めるため、音楽との出会わせ方を大切にする。

音源、映像資料等に工夫が必要と感じている。

器楽や歌唱の活動では参考音源として、生徒にとって身近なアーティストの演奏を聴かせる。鑑賞においては、教師側が気付いてほしい点を明確にしておく。生徒が気づけない時には、言葉がけや聴かせ方を工夫したい。

特別支援学校では特に視覚支援を大切にしている。視覚支援や指示で活動が明確になることもある。

【4班】坂本・多田・角田

角田先生の授業実践を軸に話し合いを行った。

榛名高校では2時間続きの授業があり、いかに集中力を切らせないかを工夫する必要がある。うまくいった実践として「耳コピをしよう」という活動がある。一人一台キーボードを使い、ペアで音を探りながら聴音していく。小さなホワイトボードを使い、ドレミをカタカナで書くところから、最終的には楽譜を作るところまで学習する。その過程で、拍子、音価、コードネーム等を学習していく。生徒のメモの取り方が上手になっていたり、楽譜を作ることにも必要感を持って学習ができたり、主体的・協働的に学習をすることができた。

ALの視点に立った授業の改善について、教師側は「音楽が好き」ということが前提にあるが、そうでない生徒に好きになってもらうために、どんな音との出会わせ方をしてあげるのがいいか、工夫することが大切である。音楽が身近にあふれている現代だからこそ、授業でどのように音楽とかかわらせるかにこだわりたい。授業だからこそ出合える、授業でしか出合えない音楽に出会わせたい。ハードルはあると思うが、教師側の提示の仕方ですぐに生徒が自ら学んでいくことができるのではないかと。

また、表現活動にも聴取（小さな鑑賞）を組み入れたい。聴取する→音楽的な感受から、こんな風に演奏したい！という思いをもつ→演奏する→うまくいかない→どのようにしたらうまくいくか工夫をする、という流れになると、生徒の活動に必然性が生まれるだろう。

また、感じたことを文字にして発表するのも一つの手段。うまく文章化できない生徒には絵に描かせる等の工夫ができるとよいと感じた。

6 指導講評

(1) 指導講評：廣澤 秀伸 先生（音楽部会副部長）

研究協議がまさにアクティブ・ラーニングとなっていてよかった。一方通行な話では、強い主体性を持った聞き手にとっては学びがあるが、そうでない場合は集中力が切れてしまう。そこでアクティブ・ラーニングをという流れになったと考える。

実技系の教科・科目はもともとアクティブな要素を持っているため、「音楽科でアクティブ・ラーニングを」というのは、言わずもがなな部分でもある。例えば合唱コンクールの練習など、様々な場面で、協働的な学習はできていた。この点について、言葉に振り回されて本質を見失わないように注意して授業改善を行う必要がある。

また、「指導」と「支援」が混同されているように感じる。「指導」は教えてできるようにすること、「支援」は子供達には教えてもできないこと、を手助けすることだと考えている。

音楽の授業では「深い学び」以上の「感動」を得られる。これは芸術特有のものである。授業が終わって音楽室から出るときに、鼻歌を歌うように心に入っているときに、授業が成功といえるのではないかと。卒業生が、「30年たってもドイツ語で『野ばら』歌えます！」と言ってくれる、そんな授業を実践し続けてほしいと感じた。

(2) 指導講評：清水 郁代 先生（音楽部会副部長）

参加者が少なく残念だったが、参加して本当によかったと感じた。先生方が話し合う姿が非常に積極的で、生徒のようにアクティブだった。特に、冒頭にあった荻野指導主事の講義が、次のグループディスカッションや模擬授業に生きていた。もっともっと時間がほしいと感じる、良い一日だった。

教師は悩みが尽きない。授業はこれで正解！というものはない。逆に十人十色で良いと考える。しかし、他校の先生方との交流を大切に、いろいろ発見して授業実践に生かすと、なにより生徒たちの学びが変化する。そのためにも、横のつながりを大切に、自身の授業力を磨き「授業を指揮する」という気持ちで臨んでほしい。

今後も、部会演奏会、授業研究会等に参加し、横のつながりを強くしていきましょう！

7 参加者（敬称略・順不同）

上田 裕信（太田東）	清水 郁代（高崎特）	廣澤 秀伸（藤岡特）	根岸 玲恵（西邑楽）
千明 昇平（西邑楽）	饗庭 麻里（市立太田）	坂本 将（長野原）	多田あやか（太女）
伴野 和章（太田東）	松平 康子（尾瀬）	前島 律子（あさひ特）	角田 幸枝（榛名）
小川 唯佳（利根商）	大小原美幸（高特）	住谷 伴（前商）	野口 瑞穂（大間々）
島田 聡（館女）			

文責：島田 聡（館女）

○ 学習指導要領の趣旨を踏まえた「芸術科（音楽）の学習活動を深めるための指導」について

1, 題材名

ドイツ歌曲に挑戦 ～主人公の気持ちを歌唱で表現しよう！～

○学習指導要領の内容による位置付け

A 表現より

(1) 歌唱

ア 曲想を歌詞の内容や楽曲の背景とかかわらせて感じ取り、イメージをもって歌うこと。

エ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して歌うこと。

B 鑑賞より

ア 声や楽器の音色の特徴と表現上の効果とのかかわりを感じ取って鑑賞すること。

イ 音楽を形づくっている要素を知覚し、それらの働きを感受して鑑賞すること。

を指導するものである。

2, 題材の目標

(1) 発声の特徴を生かし、曲想を歌詞の内容とかかわらせて、表現を工夫して歌唱する。

(2) 声や伴奏の表現の特徴を感じ取り、曲想を歌詞の内容とかかわらせて味わう。

3, 題材の考察

(1) 題材設定の理由

歌唱についての学習は、中学校まででは主に日本語の歌唱を中心に活動してきていることが、生徒の実態として捉えられている。日本語の歌唱では、当然生徒にとっては外国語の歌唱よりも歌詞の内容を理解しやすいと考えられるため、生徒の活動も行いやすいだろう。

しかし、歌詞の内容を理解しやすいことがそのまま表現の工夫へと繋がっていくわけではない。それは日本語の楽曲では、外国語に比べて伝えられる歌詞の内容が短くなってしまいうからである。そこから曲想と関わらせたりイメージを喚起したりして、生徒が「もっとこう表現を工夫したい」と思いや意図を巡らせるにはさらなる支援が必要となる。そのため日本語の歌唱から発展させて外国語の歌唱を行うことで、日本語の歌唱以上に歌詞の内容を曲想とかかわらせて、表現の工夫へと繋げることができるようになるだろう。

また日本語歌曲の鑑賞という観点では、生徒は時間や場所を限定されることなく様々なアーティストの様々な楽曲を日々耳にしている。それがそのまま日本語歌唱の鑑賞というわけではないだろうが、生徒にとっては普段聴く機会の少ない外国語、特に英語などよりも馴染みの少ないであろう外国語歌曲を鑑賞として扱うことで、より芸術的に表現の高まりを意識できるようになると考える。

学習を深めるためには、その学習の基盤ができていることが前提である。そのため、日本語の歌唱を基盤とし、外国語の歌唱を学習の深化の題材として扱うこととした。特に鑑賞により「音楽を形づくっている要素」を知覚し、歌唱によりそれらの働きを感受へと繋げ、そこから表現を工夫できるようにすることで、表現と鑑賞の関連を図りながら、これまでの学習活動を深めるために効果的な題材であると考え、設定した。

(2) 教材選択の理由

外国語の歌曲の中でもドイツ歌曲、特に F.P.シューベルトの「ドイツ・リート」を教材として扱う。それは、歌詞の内容のイメージがしやすく短い曲も多く、鑑賞との関連が図りやすいためである。また、歌詞の内容も恋愛に関係するものもあるため、生徒の興味・関心を高めやすいと考えた。

また声や伴奏の表現が多様であり、それらを含めた曲想と歌詞の内容とのかかわりを捉えやすく、表現の工夫を様々な観点から考えやすいということも選択の理由である。

4、題材の評価規準

音楽への関心・意欲・態度	音楽表現の創意工夫	音楽表現の技能	鑑賞の能力
①曲想と歌詞の内容との関わりに関心を持ち、イメージをもって歌う学習に主体的に取り組もうとしている。 ②声や伴奏の特徴と表現上の効果との関わりに関心を持ち、鑑賞する学習に主体的に取り組もうとしている。	①音楽を形づくっている要素の音色や強弱、速度などを知覚し、それらが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、曲想を歌詞の内容とかかわらせて感じ取り、音楽表現を工夫し、どのように歌うかについて表現意図をもってしている。	①曲想を歌詞の内容と関わらせて感じ取り、イメージをもって音楽表現するために必要な歌唱の技術を身に付け、創造的に表している。	①音楽を形づくっている要素の音色や強弱、速度などを知覚し、それらが生み出す特質や雰囲気などを感受しながら、声や伴奏の特徴と表現上の効果との関わりを感じ取って楽曲や演奏を解釈したり、それらの価値を考えたりして、音楽に対する理解を深め、よさや美しさを創造的に味わって聴いている。

5、学習指導と評価の計画（6時間計画）

	●目標 ○時間とねらい ・学習活動	評価規準・方法
歌 唱	●本題材の学習目標を理解し、見通しをもって意欲的に学習する態度をもつ。 ①基礎的な発声の特徴を踏まえて、「野ばら」の曲想について理解して歌唱する。 ・F.P.シューベルトの「野ばら」を歌唱し、ドイツ語の発音の特徴を生かした発声方法の基礎を習得する。 ・外国語歌曲と日本歌曲の違いを基に「野ばら」の曲想について意見交換し、その特徴をまとめる。	関一① 観察、WS
	●曲想と歌詞の内容との関わりに関心を持ち、イメージをもって歌唱する。 ②「野ばら」の歌詞の内容が表している情景を考え、曲想との関わりを意識して歌唱する。 ・「野ばら」の歌詞の内容をグループで絵に表し、情景を具体的に示す。 ・歌詞の内容が曲想とどのように関わっているのか、楽譜に記されている記号を基に考える。 ③H.ヴェルナー作曲の「野ばら」と対比し、表現上の効果に関心をもって歌唱する。 ・H.ヴェルナー作曲の「野ばら」を鑑賞し、F.シューベルトのものとの違いを考える。 ・双方を歌唱し、曲想と歌詞の内容とを関わらせた表現の工夫の課題を考える。	創一① 観察、WS 技一① 観察、WS

鑑賞	<p>●声や伴奏の特徴と表現上の効果との関わりに関心をもって鑑賞する。</p> <p>④曲想と歌詞の内容との関わりから、声や伴奏の特徴を捉えて鑑賞する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・F.P.シューベルトの「鱒」を鑑賞し、声や伴奏が表現しているものを考える。 ・「音楽を形づくっている要素」と歌詞の内容との関わりを考え、表現上の効果を味わって鑑賞する。 <p>⑤声や伴奏の表現の特徴を感じ取り、楽曲の解釈を深めて鑑賞する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・F.P.シューベルトの「美しき水車小屋の娘」を抜粋して鑑賞し、主人公の気持ちを考え、「音楽を形づくっている要素」の感受を深める。 ・「野ばら」の少年の気持ちと歌唱の表現との関わりを考え、楽曲の解釈を深める。 	<p>関一② WS</p> <p>鑑一① WS</p>
歌唱	<p>●曲想を歌詞の内容とかかわらせて、声や伴奏の表現の特徴を生かし、工夫して歌唱する。</p> <p>⑥本題材をまとめながら、歌唱発表と他グループの鑑賞をする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「野ばら」の少年の気持ちを表現できるような工夫をグループで考え、練習する。 ・グループごとに「野ばら」を歌唱発表し、鑑賞しながら曲想と歌詞の内容、「音楽を形づくっている要素」とのかかわりを感じ取る。 	<p>技一①、鑑一① 歌唱発表、WS</p>

○ 課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学びの実践を通じた成果と課題

個人で取り組むと「難しい」課題を、協働的に解決策を探り、また個人の活動に戻った時に「いつの間にか」理解できている、そして次はこんなことを学びたいという、つまり「学びに向かう力」を育むことが、「主体的・協働的な学び（いわゆる「アクティブ・ラーニング」）のよい循環だと考える。この中で、特に “学習プロセス”と “主体的な学びの過程の視覚化”の2つに焦点を当てて、実践からの成果と課題をまとめる。

なお今回は、「平成28年度教育課程研究協議会 芸術科部会 資料」の「1 学習指導要領の趣旨を踏まえた『芸術科（音楽）の学習活動を深めるための指導』の学習指導から「5、学習指導と評価の計画 5時間目」の授業展開で「主体的・協働的な学び」を取り入れた実践について検討する。

1. “学習プロセス”と“主体的な学びの過程の視覚化”に焦点を当てた実践

「主体的・協働的な学び」における“学習プロセス”とは、「習得・活用・探求」であり、つまり 「活動を段階的に捉えること」「生徒の思考や教員の評価を一つの活動で完結させないこと」が大切である。

またそれとともに、生徒が見通しを持って粘り強く取り組める“主体的な学びの過程の視覚化”、つまり生徒にとって 「活動の流れや目的が視覚的に捉えやすいこと」「個人の意見が相互作用し、考えが深まったことを視覚的に理解できること」が大切である。

それを踏まえて、以下に鑑賞を行う際、「音色」「リズム」「速度」「強弱」などの「音楽を形づくっている要素」を視点として聴く活動（「知覚の場面」）、またそれらの働きによる音楽の雰囲気をもとめる活動（「感受の場面」）それぞれの中での「主体的・協働的な学び」を考える。

(1) 本時のねらい

声や伴奏の表現の特徴を感じ取り、楽曲の解釈を深めて鑑賞する。

(2) 授業展開（導入と評価規準は省略し、「主体的・協働的な学び」の視点による教師の支援を設けた）

時間	生徒の学習活動	教師の働きかけ及び指導上の留意点	「主体的・協働的な学び」の視点による教師の支援
展開1 20分	○学習のねらい	声や伴奏による表現の特徴を感じ取れるようにする。	
	<ul style="list-style-type: none"> ・F.P.シューベルトの「美しき水車小屋の娘」を鑑賞し、声やピアノ伴奏の「音楽を形づくっている要素」を知覚する。 ・知覚したことを根拠に主人公の気持ちに焦点を当て、「表現の特徴」を感じる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・最初に例として1曲鑑賞し、ポイントや捉え方を示しておくことで、鑑賞の観点を明確にできるようにする。 ・「音楽を形づくっている要素」の補足プリントを用意しておいたり、発展課題を示しておいたりすることで、能力の差のある生徒にも対応できるようにする。 ・生徒の意見を整理しながら、それらを基にして声やピアノ伴奏の表現の特徴をまとめられるようにする。 ・主人公の気持ちと「音楽を形づくっている要素」とのかかわりに気付けるような言葉かけを行う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自がプリントに記入したことをペアで確認(=【習得】)することで、教え合いながら知覚の差や共通点などを意識できるようにする。 ・全てのグループに全ての問いの意見交流を求めるのではなく、黄色や青などの色紙を配布し、色ごとに意見交流する問いを提示する。(=【活動の流れの視覚化】) ・意見を書いたフラッシュカードをペアでスクリーンに掲示(=【視覚化】)することで、知覚したことを全体で共有できるようにする。 ・共感できる意見を記入(=【習得】)できるようにし、一人では知覚・感受ができなかった生徒もそれを取り入れて(=【活用】)今後の活動に取り組めるようにする。 ・生徒がスクリーンに掲示した意見を、同じようなもの同士でまとめたり、異なる意見を取り上げたりして考えを深められるようにする(=【相互作用】)。
展開2 10分	○学習のねらい	歌詞の内容と関わらせて表現の特徴を感じ取り、楽曲の解釈を深める。	
	<ul style="list-style-type: none"> ・「美しき水車小屋の娘」と比較しながら「野ばら」を鑑賞し、主人公の気持ちを考えて、表現の特徴と歌詞の内容との関わりを感じ取る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「美しき水車小屋の娘」の活動を基に「野ばら」へと繋げること、鑑賞と表現を関連できるようにする。 ・歌詞の内容の他、声やピアノ伴奏の声部ごとに注目して鑑賞できるように促す。 ・楽譜の中から、鑑賞で感じ取ったことの根拠を見つけられるように促す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・既に意見が記入されたフラッシュカードを用いて意見を追加、修正等(=【探求】)することで、発展的な意見交流を促す。 ・同じ「音楽を形づくっている要素」の知覚からでも、感受し表現されるものの多様性に気付けるようにする(=【考えの深まり】)。 ・スクリーンには「野ばら」の楽譜を提示(=【視覚化】)しておくことで、楽譜とも関わらせながら考えられるようにする。
まとめ 5分	○学習のねらい	目標に対する達成度を判断し、次時への見通しをもてるようにする。	
	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の学習を振り返りながら活動記録をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・本時の授業のキーワードである「表現の特徴」や「歌詞の内容」に触れ、今後の活動への興味・関心を継続してもてるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・スクリーンに提示されている意見がそのまま本時の目標や課題の具体例であることを示(=【視覚化】)し、授業内容に沿ってまとめられるようにする。 ・振り返りは題材のワークシートとは別に1枚にまとめ、毎時間の“学習プロセス”を把握しやすくする(=【評価】)。

2, 成果と課題

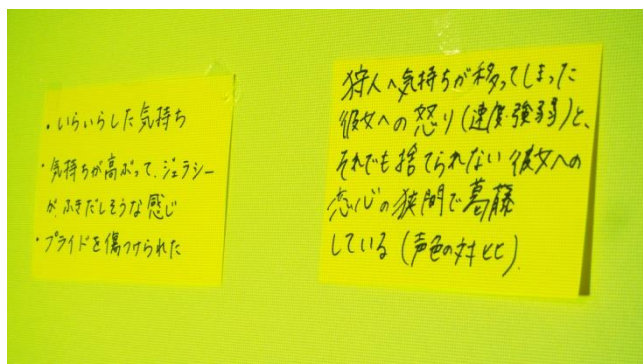
(1) “学習プロセス”

「音楽を形づくっている要素」の“習得”から“活用”へと繋ぐ「知覚の場面」における協働学習では、楽曲の鑑賞から判別した要素や聴き取った事実を述べるもので、それについての意見交流は音楽の授業に苦手意識をもつ生徒でも参加しやすく、活発な活動になった。「活発な活動＝深い学び」ではないという意識をもつことは課題の一つではあるが、自分の意見に自信をもつ、他者と関わり合うなどの「対話的な学び」の基礎を築くには有効であった。

“活用”から“探求”へと繋ぐ「感受の場面」における協働学習では、個人ではイメージはあっても表現できなかったり、自信をもてなかったりする生徒が、意見を少しずつ持ち寄りまとめる過程で、授業内容の理解が深まった。そこでは、生徒の活動が停滞しているように見えても思考は停滞しないよう教員の働きかけが課題であると感じる。グループ活動の後、生徒が自らの学習活動を振り返って次の学習に繋げる際に、前回より少しでも分かるようになってきていること、その生徒の変化を「評価」に繋げることが有効であった。

(2) “主体的な学びの過程の視覚化”

スクリーンに映したパワーポイントを使用することで、教科書や楽譜、ワークシートなど、生徒が協働学習する際にその時々で必要となるものを必要な時に確認することができていた。そうすることで生徒が思考している最中に教員が口を挟まず、活動の停滞を防ぐことができた。グループで出された意見のまとめ方を含めたその後の展開の仕方が課題であるが、紙やパワーポイントを使用することで、出された意見をいつでも見られるように保存し、その時間・そのクラスだけに留まらない、より広がりのある活動に発展できた。



さらに活動の流れを明確にする“視覚化2を意識して、楽曲ごとや1時間、1活動ごとのワークシートを作成するのではなく題材における活動全てが俯瞰できる1枚のワークシートを作成した。生徒の思考の流れが楽曲ごとや1時間、1活動ごとに停滞しないようにしたことで活動時間も短縮され、より学習内容の焦点化ができた。個人で考えて導き出したことと、グループで検討した結果出された結論、そしてそこからの生徒の変化という流れを意識し、目標達成へ向けた題材全体の見通しをもつことが課題である。

